

◆ 八王子都税事務所長賞 ◆

「日本の税金の課題」

稲城市立稲城第六中学校 3年 伊藤 舞桜

今回、日本における税金の使われ方について初めて知りました。その中で、私が一番驚き、残念に思ったことは、私たち子どもに使われている税金の量がとても少ないことです。

私たちの学校に使われている税金は、国の歳出の約五%である文教及び科学振興費のうち、小・中学校のための教育費として約二十八%が充てられています。よって、国の歳出全体としては、約一%しか使われていないことが分かります。実際、学校生活において、税金が使われていると実感できるのは、学校の設備や教科書の支給くらいです。ですが、学校の設備も十分とは言えず、教室の電気がこわれているのにもかかわらず、放置され続けていたりすることもあります。それに、教科書以外のノートや教材費、制服費、校外活動費、及び給食費は全て家庭の負担になっており、年間十万円以上となります。

その負担に対しての社会保障として少子化対策費がありますが、その歳出の割合も約二・七%と十分とは言えません。そのうえ、負担を調整するための公助や手当では、家庭の所得によって制限があり、所得が高く、納税額が高い人がもらえないという状況なのです。

日本における税金の使われ方の問題は、アンバランスさにあると思います。その原因は、少子高齢化による年金や、医療費の増加、また、国際情勢によって防衛費を拡大する必要が出てきたことだと言われています。そしてこれは、日本に限らず、先進国共通の課題のようです。しかし、いわゆる税金の無駄使いと呼ばれるケースは、連日、ニュースでも報道されています。この点については、アンバランスさを改善していける余地があると思います。使われるべきところに直接税金が使われるしくみが必要だと思います。身近なところで言うと、それぞれの家庭に対する児童手当というのではなく、直接、学校に支給され、それぞれの家庭が、給食費や教材費を払わなくて済む仕組みができると公平になりますし、事務作業の簡略化につながり、学校の先生方の負担も減ると思います。

そうして、身近なところから、状況が改善していけば、税金の大切さが実感できるようになり、私たちの世代がよりよい税金のしくみを考えるきっかけになるのではないのでしょうか。